



新刊  
一  
口  
古  
書  
集  
下

特別  
イ 4  
3163  
4(2)





頁  
14  
3163  
42

古今和歌集卷第十一

恋歌一

題一 次

よるん人あそむ

都のよるん月のあそむ草のあそむささぎのあそむ

素性法師

よるんあそむあそむあそむあそむあそむあそむあそむあそむ

紀貫之

うの川のあそむあそむあそむあそむあそむあそむあそむあそむ

在原勝直

白波のあそむあそむあそむあそむあそむあそむあそむあそむ

在原元方

もねのあそむあそむあそむあそむあそむあそむあそむあそむ





三白のついでに...

三白

お中へい... 者おし... ち... び...

在原... 相長

三白のついでに...

三

在原...

お中へい... ち... び...

三白

在原...

お中へい... ち... び...

在原...

お中へい... ち... び...

三

在原...

お中へい... ち... び...

在原...

お中へい... ち... び...

お中へい... ち... び...











Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines.







はらわとを神よたまへおまごの辰の波がらこまら  
せー  
おまら

をらるの波と神のまをさすの我らまらあまたらうせら  
寛平甲申年すらの言のまを合らこ

おまらとての朝長

喜つひかおまらとてのまらとてのまらとてのまら  
任のいれまらとてのまらとてのまらとてのまら

おまらとて

まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
紀のまらとて

まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら

はらわとにむくまらとてのまらとてのまらとてのまら  
我家のまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
川の波よまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら

おまらとて

おまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
おまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら

おまらとて

まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら

おまらとて

まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら  
まらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまらとてのまら







見度録

独一の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

あつた

地國の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

世に我々の世に

世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

いふ

我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

題一

世に我々の世に

我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

世に我々の世に

我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

世に我々の世に

我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に

我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に我々の世に



あはれなるかみいぬあひまはるるもはげにたかから  
かみいぬ

我をまきいぬはあはれなるかみいぬはあはれなるか  
紅のうららひはあはれなるかみいぬはあはれなるか  
白のうららひはあはれなるかみいぬはあはれなるか

あはれなるかみいぬはあはれなるか  
あはれなるか

あはれなるかみいぬはあはれなるか  
あはれなるか

あはれなるかみいぬはあはれなるか

若く

あはれなるかみいぬはあはれなるか  
あはれなるか

あはれなるかみいぬはあはれなるか  
あはれなるか

あはれなるかみいぬはあはれなるか  
あはれなるか

あはれなるかみいぬはあはれなるか  
あはれなるか

あはれなるかみいぬはあはれなるか  
あはれなるか







影一うら

くみのひらり波

よるあふかたけりくくしほりまはちりあつたの影成に  
後よけくまある物いよまはちりまはちりまはちり  
ゆいめあの方の書いほりまはちりあつたの影成に  
はあふかたけりくくしほりまはちりまはちり

たかひの朝長

後の影一うらりくくしほりまはちりまはちり

小野小町

いよまはちりまはちりまはちりまはちり

源宗干頼長

影一うらりくくしほりまはちりまはちり

いよまはちり

うらりまはちりまはちりまはちり

あつたの影成

影一うらりくくしほりまはちりまはちり

いよまはちり

影一うらりくくしほりまはちりまはちり

いよまはちり

影一うらりくくしほりまはちりまはちり

いよまはちり

影一うらりくくしほりまはちりまはちり

いよまはちり

影一うらりくくしほりまはちりまはちり

いよまはちり







忍一狂歌

露

天の雲霞はちかき霞もあはれなる

あはれなる

歌とてあはれなる歌のあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

田

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる







いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女

いかにあはれにうらやまはれんか  
かよふてはるる  
平貞女



古今和歌集卷第廿四

恋まの口

野らうけ

とん人あう活

陰奥のらうけのあはれたうこはるあふしやうらん  
あひまはらあま事とあはれしきよひさくしうくう弱

けら梅あ

いその種あらのまうから申しよはるあふし思ひまうやう

藤原のたのめ

あひまはらあま事とあはれしきよひさくしうくう弱

伊勢

あひまはらあま事とあはれしきよひさくしうくう弱

とん人あう活



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in several lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in several lines across the page.











あはれなる御心  
を御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

11

あはれなる御心  
を御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては

御座りては  
御座りては  
御座りては



あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

大はくはあり

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

典侍在原とらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

た

典侍在原とらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

田院

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ

あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ  
あまのこゝろをわづらひてはらうとぞ



らん人し次

あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて

あまのこゝろ

あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて

古今和歌集卷第十五

戀のあま

あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて  
あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて

在原業平和歌

あまのこゝろをわたりてあまのこゝろをわたりて

あまのこゝろ

在原業平和歌











伊勢

かしの葉をみよふとて  
雲林のみに

あまのこゝろを  
さへく

今やそらも  
小野

あまのこゝろを  
あまのこゝろを  
あまのこゝろを  
あまのこゝろを  
あまのこゝろを

三十一

あまのこゝろを  
あまのこゝろを

あまのこゝろを  
あまのこゝろを

あまのこゝろを  
あまのこゝろを

あまのこゝろを  
あまのこゝろを

源宗平

あまのこゝろを  
あまのこゝろを  
あまのこゝろを  
あまのこゝろを  
あまのこゝろを



八潮

きこのは藤原がてらゆり海にほのまゝに今もまゝにほのまゝに  
あひらねむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの

あはれむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの

伊勢

久岐の舟と我をな思ひよむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの

あはれむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの



らん人

あはれむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの

み部

あはれむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの

らん人

あはれむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの  
をうかへむらさきのをうかへむらさきのをうかへむらさきの



あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

印

あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに

あつたてのうらなひに  
あつたてのうらなひに



よるんを〜らる

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

有るにたれ

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

いかにせんか

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに  
いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

印

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

小町

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

平〜ん

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

清人〜治

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに

いかにせんか

いかにせんかといふ事にておぼろしくいふに人の心  
を測るの事といふはさういふ人の心をはかる事  
に似ていふ事にていふに、世をみる事にていふに



まゝ

まゝ

おのゝけのついでに  
おのゝけのついでに  
おのゝけのついでに  
おのゝけのついでに

古今和歌集巻第十六

哀傷歌

あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ

小帯なるものの  
小帯なるものの

あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ

よせし法師

あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ  
あはれなるものこそ

信教勝延



世に輝くよう後を継ぐものこそが真の権威である

あつたのり

海を渡る舟の楫は心あつたものこそが真の力である

故郷の故郷の舟の楫は心あつたものこそが真の力である

心あつたものこそが真の力である

あつたのり

海を渡る舟の楫は心あつたものこそが真の力である

あつたのり

あつたのり

海を渡る舟の楫は心あつたものこそが真の力である

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり

あつたのり



ういのかきひしよち海

九海内三つね

非き月内海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海

たきこ

らうちひしよち海  
思ひよち海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海

らうちひしよち海  
思ひよち海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海

思ひよち海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海

思ひよち海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海

思ひよち海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海

思ひよち海

思ひよち海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海

思ひよち海

思ひよち海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海

思ひよち海

思ひよち海よめいもちらうたふひのたきと成るこ  
らうちひしよち海



~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

傍心海船

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



Handwritten text in a cursive script, likely a continuation from the previous page.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.



おのりてのつらきこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと

なほとてしるすこと

おのりてのつらきこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと

なほとてしるすこと

おのりてのつらきこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと

なほとてしるすこと

おのりてのつらきこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと

おのりてのつらきこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと

なほとてしるすこと

おのりてのつらきこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと

おのりてのつらきこと  
なほとてしるすこと  
なほとてしるすこと



古今集初集卷第七

雜歌上

野上

後人あつた

御人よあそとくけりあつた  
 思ふと地海をわたりて  
 うまき波がうたげま  
 限りた若うたむに  
 むらひのひのひの  
 むらひのひのひの  
 先れおしうと  
 とくあつた

なるのしる朝長



Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is written in a fluid, connected style.

Handwritten text, possibly a signature or a specific note at the end of a section.

Handwritten text in cursive script, continuing the narrative or correspondence.

Handwritten text in cursive script, concluding the page's content.

Handwritten text, possibly a signature or a specific note at the end of a section.

Handwritten text in cursive script, continuing the narrative or correspondence.

Handwritten text in cursive script, continuing the narrative or correspondence.

Handwritten text, possibly a signature or a specific note at the end of a section.

Handwritten text in cursive script, continuing the narrative or correspondence.



月夜に照らす花の影は  
 静かに沈むる夜の静けさ  
 花の影は静かに沈むる  
 夜の静けさを照らす  
 静かに沈むる夜の静けさ  
 花の影は静かに沈むる  
 夜の静けさを照らす

静かに沈むる夜の静けさ  
 花の影は静かに沈むる  
 夜の静けさを照らす  
 静かに沈むる夜の静けさ  
 花の影は静かに沈むる  
 夜の静けさを照らす  
 静かに沈むる夜の静けさ  
 花の影は静かに沈むる  
 夜の静けさを照らす







Handwritten text at the top of the right page.

Handwritten text in the upper middle section of the right page.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines.

Handwritten text at the top of the left page.

Handwritten text in the upper middle section of the left page.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines.



おひらき... 我身成す... 老い... 海物

ら... の... 思... の... 人... せ

あ... せ... 余... の... せ

あ... の... せ

あ... の... せ

あ... の... せ

あ... の... せ







水均法師

あつたらふくそとらせむ布のわきを成すにぬいぢて

題一 次

神たい法一

まよたんの瀬よかきあつたらなしてしるけ衣成すにぬいぢて  
新門よまきしてしるけのこころをいぢる

伊勢

あつたらふくそとらせむ布のわきを成すにぬいぢて

朱葎院の沖にぬいぢての籠りてきんとて

うん月のあつたらぬたつてまきしてあつたらぬ

まきしてぬいぢてのこころをいぢる

たつたらぬのこころ

あつたらふくそとらせむ布のわきを成すにぬいぢて

いえのよかりとらせむのこころをいぢる

たつたらぬ

あつたらふくそとらせむ布のわきを成すにぬいぢて

あつたらふくそとらせむ

たつたらぬ

あつたらふくそとらせむ布のわきを成すにぬいぢて

あつたらふくそとらせむのこころをいぢる

あつたらふくそとらせむのこころをいぢる

あつたらふくそとらせむのこころをいぢる

あつたらふくそとらせむ

三条の野

あつたらふくそとらせむのこころをいぢる



屏風の雲のうらみ花はよらぬ

けしきよ

晴初にけしきよらう花のうらみ花はよらぬ  
屏風の雲のうらみ花はよらぬ

坂上・後ついで

今昔のうらみ花はよらぬ  
うけま

古今和歌集巻第十八

雑歌下

野うらみ

よる人うらみ

春のうらみ花はよらぬ  
野うらみ  
よる人うらみ  
小野うらみ

春のうらみ花はよらぬ  
野うらみ  
よる人うらみ  
小野うらみ

春のうらみ花はよらぬ  
野うらみ  
よる人うらみ  
小野うらみ



あいえいでたくしやしをまらりくろくをまらよ  
よらうろし

小野小町

徳めぬておはは草の根成たしてはそぬるわいらん思  
題ちう順

あふれてぬ幸ううこそそ昔は思るわねえう成るれ  
しうん人し順

あつきてぬされたにまどく病の昔はこそ病源かやんら  
を中の子にぞほしきとけさくまらうろぬは源成より  
よの中ハさううううう作いともさるまふういさうまね  
せ中よらうう病のわりには喜もやん人あううやんえ  
し甲のぬのぬのまし事うあませのうたもてうい  
いしだたのらんこ

白きのはれたたのびを思しおまらひはあらかうゆ  
あうろいしから

あまもまんとてことく世中病のうとくら風うら  
うせら

いれらるはとくさん心う野あまのいふたうた  
しうん人し順

世の中昔うらもらうあまさん病のいのちよさあわう  
よ中はいとくしあま草まもあゆるうはれたのあまおさん  
みう病のいれからう宿ゆるをのうたはのうねさん  
せもあまうらううあまかう中病のいれたうあま  
いらん心あまの中よいしあまのうたはのまこえこえ  
あまのいのちあまへいしあまうたはあまのいしあま



をのうらみくはらむとて思ふは心はまはらむとて思ふは心  
ちかき心なれ

心なれ

ふらふらみくはらむとて思ふは心はまはらむとて思ふは心  
ちかき心なれ

心なれ

ふらふらみくはらむとて思ふは心はまはらむとて思ふは心  
ちかき心なれ

心なれ

ふらふらみくはらむとて思ふは心はまはらむとて思ふは心  
ちかき心なれ

心なれ

あはれ人の心なれ

あはれ人の心なれ

心なれ

あはれ人の心なれ

心なれ

在源行平親長

あはれ人の心なれ

あはれ人の心なれ











ふりて可なりとて目には見えずに  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

宗岳大輔

君臣の心とていふ所の白き  
心とていふ所の白き  
心とていふ所の白き  
心とていふ所の白き

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて



いふことばもさうはるるよがりの業よをくわ  
らう時ちぢれ 二条

人あつたに成るにけりし時ちぢるの都とくは成る  
郡いらぬ よる人ちぢる

せ中のけしめしとしていふもいふまはるを寄い  
道場の前のふにじりし作をけしめし信に  
風はよあつたにけりし時ちぢるの都とくは成る

家はよりしていふ 半解

あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
けりし時ちぢるの都とくは成る  
く *Quarantena* の *Quarantena* の *Quarantena* の  
あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る

あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
けりし時ちぢるの都とくは成る  
けりし時ちぢるの都とくは成る

あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る

あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る  
あつたにけりし時ちぢるの都とくは成る























歌一

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

歌一

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

Amur's of the Sun

Amur's of the Sun in the East of the Sea  
Amur's of the Sun

Amur's of the Sun







寛平御時書きたる文に合ふ

友原信光

寛平御時書きたる文に合ふ

友原信光

寛平御時書きたる文に合ふ

平貞女

寛平御時書きたる文に合ふ

友原信光

寛平御時書きたる文に合ふ

友原信光

寛平御時書きたる文に合ふ

友原信光

平貞女

寛平御時書きたる文に合ふ

友原信光

寛平御時書きたる文に合ふ

寛平御時書きたる文に合ふ

寛平御時書きたる文に合ふ

寛平御時書きたる文に合ふ

友原信光

寛平御時書きたる文に合ふ

友原信光

寛平御時書きたる文に合ふ

寛平御時書きたる文に合ふ



いづれにても我々の世に於ては其の如く  
其のそのをばらばらとて我々の世に於ては  
其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

平中興

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

左の如く

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

なにか

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

伊豫

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

よるん

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

なにか

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

なにか

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

題

なにか

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

大補

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては

なにか

其のそのをばらばらとて我々の世に於ては







古今和歌集卷第二十

大尋 藤原方

松平のほひ乃こ

朝一き年の若よどく一うもまほのふゆにや

日中記三に有まうしとらうのたか

あうれをまこころ

ちとらうのうしよ海雲はうのむもあや

あうれをま

わしちもちんはうのうしよのうしよのうしよ

うしよのうしよ

あうれのうしよのうしよのうしよのうしよ

あうれをま











いづれし

はらねん

うぬいふまじく〜是常の世に居るはらねん

在教云下空蟬上

勝信

かゝるもてはたまたまのそとんく〜其ははらねん

なごまの事友則下

く程乃たも

つねま

いづれははらねん女書つたけよれ〜かえりてはらねん

忍草利貞下

なまの井もや〜海

なごま

よしの井〜はらねんはらねんはらねんはらねんはらねん

かゝるはらねん

うりとの あらねん

わらねん

うたはらねん〜そとんくはらねんはらねんはらねんはらねん

いづれはらねんはらねんはらねんはらねんはらねん

あゝはらねんはらねんはらねんはらねんはらねん

桂宮下

卷第十一

奥山菅の根〜つらなる電下

まじくはらねんはらねんはらねんはらねんはらねん

はらねんはらねんはらねんはらねんはらねん

卷第十三







古今傷物集序

沈洪聖

圖

史和歌者託其根於心地發其花於詞林志  
 也人之在世不能無為思慮易遷哀樂  
 相衰感生於志詠形於言是以遠者其痛  
 系悲者其吟想可以述懷可以發憤動  
 天地感鬼神化人倫和史婦莫宜於和歌  
 傷歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五  
 曰雅六曰頌若夫春鶯之囀花中秋蟬  
 之吟樹上醜魚曲折各發歌物皆有之  
 自然之理也物而和世七代時質人淳情欲  
 無分和歌亦化還于素盡鳥言則出云  
 園歌有三十一字之跡今反奇之化也其



後雖天神之孫海童之女莫不以此歌通  
情者及人代世風大起長秋短亭旋頭  
混平之勢新解非一源流漸繁登於拂  
雲之樹生自寸苗之燧浮天之波起於一  
滴之露至如歌波津之什歌  
天皇富緒川之篇太子或奉開神異或  
無入焉言但見上古乎多存古質之語未  
為日月之能德為教滅之端古  
天子每良辰每京師約良辰宴送者賦和  
歌君臣之情由斯可見賢愚之性於是相  
分取以隨民之欲擇士之才也日大津皇子  
之初作初賦詞人才子慕風繼塵移情

漢家之字化我日域之俗民業一政和秋漸  
表然於立先師榜中奪義者之振神妙  
之思獨步古今之間有山邊志人者並和秋  
仙也其情業和秋老綿之不散及彼時愛  
澆滯人貴本者德浮詞之與歌流泉涌其  
實皆落其花孤榮之好每之家以此  
為畫鳥之使乞食之客以此為活計之孫故  
半為婦人之心難述古史之新近代存左風  
去終之三人然長短不同論以九年如山僧  
正知得秋神然之詞花而女實如畫畫好女  
情初人情在原中將之秋其情之解之  
詞不也如畫花紫少彩色而有志者又



琳巧琢物純甚新也俗如賣人之美雖亦字  
沿山借以撰之詞甚麗而首句滄海滄山  
秋月過曉雲之小野小野之秋古衣通雁之  
流也然整而無氣力如病婦之志花於  
大友黑主之秋古精乞大支之江也頗有逸興  
而辭甚鄙如田支之息花前也此外如流  
聞者不可勝數其大應皆以整為甚不知  
整之類也俗人爭事爭利不思源和秋  
整卦之類貴兼相得遂得全錢而肯  
未齊而中必先滅也世上適為後世後知者  
唯和秋之人而已何者諸出入身義憤神  
明也昔王母 天子祐仙后之撰可兼集自

命學東時歷十代教過百年之度如方身  
不被採雖風流如野亭相親情如在納云  
而皆以他方闕不以斯道取  
陛下冲宇中今九載仁流物澤湖之外惠  
茂鏡波山之陰潤春為柳之多寒之用之  
砂長為巖之石洋之滿耳思繼既絕之風  
欲其久廢之道家注大內祀化本則序書  
所執純君之前甲裝少自九河內躬恒老清  
以齊生云生惠齊亦名秋家集并古來  
蕭高秋曰後万葉集也其年之詔部魏所  
也之方勅為二十卷名曰古今和歌集長  
等同少事也之整名竊秋夜之長况哉



進恐時俗之嗷  
區悲文苑之  
探六通遇  
紅粉  
之申  
具以示  
吾乃之  
再昂  
嘆平人  
凡既  
沒  
和祓  
不在  
斯外  
于時  
延喜  
五年  
歲次  
乙丑  
四月  
十日  
百長  
費之  
等謹  
序

延寶六年<sup>戊午</sup>年正月吉日

唐本屋

喜若衛刊



